高校生の人格発達と進路決定

——テストバッテリーを用いての縦断的事例研究——

教育心理学研究室　下　山　晴　彦

The Relation Between Personaliry Development and Career Dicision-Making of High School Students

——Longitudinal Case Study with a Battery of Tests——

Haruhiko SHIMOYAMA

The present study was planned to investigate the relation between personality development and career decision-making which was assumed as a developmental task in middle adolescence. Two cases (A: a,girl, B: aboy) were analysed. They were longitudinal case studies with a battery of tests (TAT, SCT, Quastionaire, Interview). It was found that while A, who was high developed, was exploring her career, B, who was low developed, was fore-closured.

This result suggests the distrortion of career decision-making process at high school.

Ⅰ　問題と目的
Ⅱ　方　　法
　A　対象者
　B　手続き
Ⅲ　事例研究
　A　事例A子
　　1　高校2年時のA子
　　a　SCT 所見
　　b　自分の確立度面接
　　c　TAT 所見
　　d　教師による評価
　　e　2年時の諸検査の総合所見
　　2　高校3年時のA子
　　a　SCT 所見
　　b　自分の確立度面接
　　c　TAT 所見
　　d　教師による評価
　　e　3年時の諸検査の総合所見
　　3　進路決定について
　　4　むすび
　B　事例B男
　　1　高校2年時のB男
　　a　SCT 所見
　　b　自分の確立度面接
　　c　TAT 所見
　　d　教師による評価
　　e　2年時の諸検査の総合所見
　　2　高校3年時のB男
　　a　SCT 所見
　　b　自分の確立度面接
　　c　TAT 所見
　　d　教師による評価
　　e　3年時の諸検査の総合所見
　　3　進路決定について
　　4　むすび
Ⅳ　要　　約
付　　記
文　　献

Ⅰ　問題と目的

「進路決定」とは，発達心理学の観点からみると，乳幼児期に始まり，青年期前期にはっきりした形をとってくる親からの独立のプロセスが最終段階に入ったことを示すものである。換言するなら，成人に向っての発達過程の最終的臨界期(critical point)のひとつと言えるだろう。このような観点から進路決定を位置づけるものとして Blos, P. (1962) の青年期発達論と Erikson, E.H.

(1962, 1980) の Identity 論がある。Blos は青年期を5つの下位段階に分けている。その中で，青年中期（≒高校）は，「自分とは何か」を考える自己模索期とする。この中期の課題が達成された後の青年期後期（≒高校卒後）は，「この方向で自分を試すんだ」「これが自分の道だ」という形で，ある一定の選択の中で，自己実現を試みる自己限定期である，この自己模索期から自己限定期への橋渡しとなる重要な段階特異的発達課題が進路決定である。さらに，自己限定期の中で，自己の統合がなされ，最終的な職業決定がおこなわれる。それにより，青年は，後青年期に到るとされるのであるが，この職業決定は，心理―社会的側面を重視する Erikson の Inentity の達成の重要なポイントとなる。この点に関しては，Munley, P.H. (1977, 1975), Holland, J.L. & Holland, J.E. (1977), Galinky, M.D. & Fast, I (1966) により実証的な研究がなされている。このように，進路決定

表1　発　達　段　階

後青年期 Post Adolescence	＜性＞　結婚，家庭の形成 ＜親＞　親との和解 ＜友人＞ ＜自我＞　社会的役割の安定 ◎選択された枠内での自己実現
青年期後期 Late Adolescence	＜性＞　自我親和的な性の体制化，愛情関係のタイプの確立 ＜親＞　親との対話 ＜友人＞　社会的交友の拡がり，異性との親密な関係 ＜自我＞　同一性の確立，生活史を通しての連続性と同一性 ◎自己実現のための一定の職業選択（cf. Identity Diffusion）
青年期中期 Ⅱ Middle Adolescence Ⅱ	＜性＞　防衛機制の安定．適応的防衛機制の形成 ＜親＞　親からの精神的独立，親との対決，親の客観的評価 ＜友人＞　対人関係の深まりと安定 異性との現実的な交流，異性愛対象の発見 ＜自我＞　現実吟味の増大。社会意識の増大。性役割の形成 ◎社会的自己限定の開始，将来への見通しをもつこと。〔＝進路決定〕
青年期中期 Ⅰ Middle Adolescence Ⅰ	＜性＞　二次性徴，性衝動に対する一定の対応，防衛機制の形成（cf. 行動化） 性器衝動の高まり ＜親＞　親からの分離が進む，親に対する批判。家庭外での対象関係の形成 ＜友人＞　対人関係の模索と拡大（cf. 不安定な対象関係と自我境界→ひきこもり。内閉的空想），異性への関心と交流，異性の理想化，空想的愛 ＜自我＞　内的体験の追求，役割実験，空想的自己模索（cf. 知性化）
青年期前期 Early Adolescence	＜性＞　性衝動，二次性徴の発現とそれへの対応（cf. とまどい，罪悪感） ＜親＞　親からの分離の始まり。友との間に距離をとり始める。反抗（cf. 分離不安，抑うつ感。） ＜友人＞　同性の仲間との親密で理想化された友情の高まり 異性への興味（cf. 反動形成）騒々しい異性への接近 ＜自我＞　価値，自我理想への手探り。
前青年期 Pre Adolescence	＜性＞　両性的構え，性的好奇心の発現 ＜親＞　依存的関係の中で親への反発 ＜友人＞　同性集団への帰属，遊び仲間的かかわり。 ＜自我＞　未分化であるが，青年期に向っての基礎固め。

注）○中期をさらにⅠとⅡに分けた。Ⅰの特色が，空想的実験的であるのに対して，Ⅱでは現実性や社会性が出てくる。
　○（cf.　）内の内容は，その段階の課題達成に失敗した時に陥る可能性のある状態である。

は，人格発達と密接に結びついたものであり，本研究ではこの点に注目し，Blos の理論を参考にして，高校生の人格発達の程度と進路決定のあり方の関連を探ろうとするものである。その際，Offer, D. & Offer, J.B.(1975) や村瀬(1974, 1977)を参考にして，投影法である TAT を含むテストバッテリーによる縦断的事例研究という方法を用いた。この方法を用いることによって，単なる意識レベルだけでなく，無意識レベルをも含めた青年の力動的発達を探ることができると考えたからである。

なお，広井，中西（1978）が指摘するように，我が国において，進路決定は，その選別的側面でのみ利用され，進路指導≒受験指導と言っても過言ではない状況にある。この進路決定の人格発達的側面の無視は，岨中（1981）も指摘するように，大学生の留年現象の大きな原因になっていると考えられる。このような状況の中にあって，進路決定を人格発達の側面からとらえ直す研究は，今後，ますます必要となると考えられる。

Ⅱ 方　法

A 対象者

1980年の6月に都内の公立A高校の2年生全員に村瀬式 SCT（村瀬（1972））を実施した。その中から，発達段階（表1）と状態（表2）に関して，典型的な反応をした生徒を20名ほど抽出し，事例研究をおこなった。本論文で扱うのは，そのなかの2事例である。この2事例を選んだ理由は，両者が好対称をなしており，両者を比較することにより，現在の進路決定状況をある程度，浮き彫りにできると考えたからである。

なお，表1，表2は，青年期状況を理解する枠組として筆者が作成したものである。表1の発達段階は，Blos P.（1962）の発達段階論を基本的に取り入れている。表2の状態は，Marcia, J.E.（1966, 1980）の Identity Status や村瀬（1972）の精神健康尺度を参考にして筆者（1981）が考案したものである。表1，表2に記述してある発達段階と状態は，約200人の SCT 反応に基づいて原案に修正を加え，現在の青年期状況に，より適合するようにしたものである。

B 手続き

2年間にわたって以下の調査を実施した。

1980年（2年時）

6月：SCT（村瀬式青年期用文章完成法）

9月：TAT（Murray 版，14枚）

表2 青年期の状態

破壊的混乱（Disarsrous Confusion）
混乱が非常に強い場合である。自分の確立に向っての過程というよりも退行的，自己破壊的傾向が強い
受動的混乱（Normative Confusion—Passive）
外的要因（ex 親がうるさい）や受容せざるを得ない要因（ex 身体）に混乱の原因があり，しかもその混乱に受動的に対している。
能動的混乱（Normative Confusion—Active）
自立していこうという内的意欲に基づき，前向きに努力している際の混乱。将来に向って自己をよりよくしていこうと試行錯誤している。
自己保護的反応（Self-Preventive Reaction）
内面的に不安を感じているが，それに正面からとり組まず，目をそむけている。表面的反応と内面とでは gap がある。次の3つに分かれる。① 無気力　② 防衛的　③ 否定的同一性
普通の順応（Favorable Adaptation—Common）
外的価値観や考え方をうまくとり入れて，自分をまとめつつある。模索経験がないため，その人の独自性はなく，一般的である。
有能な順応（Favorable Adaptation—Able）
混乱なしに，その人なりの考え方を拡げている。自分に自信をもっており，失敗の経験が少なく，明るくのびのびしていて健康的である。

〃　：自分の確立度面接（下山（1981））
〃　：教師による評価
　　1981年（3年時）
6月：SCT
9月：TAT
〃　：自分の確立度面接
〃　：教師による評価
10月：進路発達調査（CDT-3 実務教育出版）
〃　：進路決定地位調査（CDST）
〃　：進路決定に関する面接
〃　：進路決定に関する教師評価

SCT, CDT-3, CDST は，教室で担任により生徒全員に実施されたものである。その他の調査は，筆者が個別に，直接，面接をおこなった。

◎TAT で用いた Card は，No.1，2，3，5，6，7，8，10，11，13MF，14，15，19，20の14枚である。解釈は，山本（1966）村瀬（1977）を参考にした。

◎自分の確立度面接とは，身体，性，対人関係，その他の領域に関する質問によって構成されている半ば構造化された面接である。

◎教師による評価とは，担任教師に生徒の性格，対人関係，成績等について情報を伝えてもらったものである。

◎進路発達調査（CDT-3）とは，中西，竹内，那須共著の進路調査であり，進路希望プロフィールと選択理由，進路知識，進路成熟，職業統覚検査の4つの下位尺度より構成されている。実務教育出版から市販されている。

◎進路決定地位調査（CDST）とは，筆者（1982)が作成した調査であり，進路 SCT，選択肢，自由記述より構成され，表3にあげた8つの進路決定地位の評定をおこなう。

表3　進路決定地位

A	Achievement 模索経験を通して，自分の過去と現在を将来（＝進路）に，自然なかたちで統合し，具体的進路を選びとり，その方向で，自己実現の努力を始めている。
F	Foreclosure 模索なしに，すんなりと具体的進路が決まっている。将来に対して現実的で肯定的展望をもち安定している。
D	Defense 不安の防衛のために，自己の進路を限定し，それに強く identify している。決定過程において硬さ，不自然さが感じられる。
H	Hope 将来に向っての希望が決まったという状態で，具体性が乏しい。将来に対し楽観的であるが，現実吟味に欠ける。
E	Exploration 将来に向っての自己限定に，真剣に取り組んでおり進路決定に関して（いくつかの選択肢の間で）前向きに模索している。
M	Moratorium 具体的に進路を決定するのは，まだ先のことと考えて決定を先にのばしている。自己限定について，切迫性はなく楽観的である。
C	Confusion 進路決定をしようとするが，決まらず混乱している。進路決定を前にして，何かしらの不安をもって対処している。
I	Indifference 進路決定については，無関心で自己の将来に対して現実的な展望がない。過去の統合が出来ていない。

Ⅲ　事例研究

A　事例　A子

2年時の SCT の結果から能動的に自立に取り組んでいる事例ということで選択した。家族構成は父（52）母（51）兄（20，大学生）本人の4人家族である。身体は中肉中背でバレー部に在籍していというだけあって動きは機敏で生き生きとした印象を受けた。音楽や文学を好み，人との出会いを大切にし，常に自分を向上させたいと願う彼女は，やや夢想的ではあるが，年上の男性とも交流があり，発達段階は，実験対象生徒の中では，最も高い部類に入る。そのような彼女であるが，進路決定に関しては将来やりたいことがいくつもあり，しかもそのやりたいことが両親の意見と折り合わない。そのため進路は決まらず模索中である。このA子の2年，3年時の発達状況と進路決定過程について以下に事例研究する。

1　高校2年時のA子

a　SCT 所見

文章は長く，複雑で思考・模索の跡がうかがわれる。第一の特色は，常に自分をよりよくしていこうという意欲である。「私が知りたいのは，どうすれば早く走れる

か，成績が上るか，根性がでるか，もっとよい人間になれるか。」「私の希望は，めいっぱい寝て，めいっぱい音楽きいていい女になりたい。もう一杯ありすぎるよ。」等々にそれがあらわれている。しかし，ただ単にのびのび適応的というのではなく，家族（父）に対しては批判的な目でみている。学校でも楽しいことばかりではないようだ。「学校で私は，苦しみをじっとこらえ楽しい顔をしている。人に自分の本心を見せるのは勇気がいる。」いろいろな夢をもち，希望を語ると同時に，人間の影の部分に敏感で大人に批判的な青年期中期の心的特性を彼女はよくあらわしている。そのような中で青年期後期への橋渡しになる「大人になることへの自覚」が少しずつ芽生えてきている。「大人は，わからない人ばかりいるけれど，いろんな話を聞いてみたいなと思う大人も現われてきた。」それと同時に現実吟味能力も増大し始める「人はたいてい，自分より幸せそうにみえるが，そうでもないことがこの頃よくわかってきた。」

Blosの発達段階に従うなら，A子は青年期中期の模索のただ中にありながら，そのある部分において後期への方向づけの芽生えが始まりつつある状態と言える。つまり表3では中期Ⅱにあたる。それゆえ，まだぼんやりとしているものの彼女の関心は自分の将来に向かい始める。「とても気にかかるのは，自分の将来です。」

b　自分の確立度面接

SCT とほぼ同じ傾向である。運動を好みおしゃれで，音楽に熱中し，人との出会いを大切にする。女性に生まれたことを肯定し，よりよい女性になろうと心懸けている。中二の頃，夫婦ゲンカ，友人関係等で危機を経験したが，今はそれほど気にならない。父親には批判的である。年上の男性（大学生）のことを想っており，自分の結婚について考えている。青年期中期Ⅱの課題である「親からの分離と異性愛対象の発見，性役割の形成」へと進みつつある。ただし，まだ現実性は弱いと思われるが。

彼女は，自己イメージを「まだ成育中の木で，枝を四方八方に拡げている。」と述べている。確かに彼女からは成長している姿が感じられた。

c　TAT 所見

大きく分けて次の二つのテーマに分けられる。

◎　自己発見への出立，模索―困難への直面（Card 1，2，7GF，11，14，20）

「欲しいと願っていたバイオリン」（1），「農家を継がずに町に勉強に行く」（2）等自分を向上させていこうという前向きの意欲はあるがバイオリンは思うように上達しないし，町ではうまくいかずに故郷に戻ったりする。自己発見への希望とその途上での困難が語られる。

◎　異性愛実験（Card 5，6GF，8GF，10，13，15）

異性との関係において試行錯誤の段階である。いとしい人に想いをはせる。（8，15）あるいは，本当は好きな人に冷たくしてしまい，あとで後悔する主人公（5，10）などに異性へのあこがれ，接近―回避がみられる。まだ，夢想的要素が多分にあり，関係は不安定である。その意味で彼女は，青年期中期Ⅰの特徴であるナルシスティクな異性愛（＝空想的異性愛，やさしい愛）の中にいる。遠くにいるいとしい恋人を想うカード（8）を最も好きな Card としているところにもそれがあらわれている。

＜まとめ＞

Card 19の物語（吹雪の中の一軒家，外は寒いが家の中ではパーティで笑い声，翌日，嵐は去って一面銀世界）にみられるように基本的には内面の豊かさと他者への共感能力を持ち合わせており，その上でいろいろな試行，実験をおこなっている。ただし，まだナルシズム，空想的な所があり，現実の辛さや人の哀しみに十分直面しているとは言えない部分がある。

d　教師による評価

特に目立った子ではないが，クラブや生徒会はしっかりやっている。友人関係は安定している。

e　2年時の諸検査の総合所見

自己の向上に能動的に取り組んでいるが，それがすべてうまくいっているわけではない。しかし，意欲は強く，希望を持ち，模索する彼女がいる。女性特有の空想的な面をもちつつも，親からの分離，性役割の模索，異性愛対象の発見等の青年期中期の課題の中で成長している。発達段階は，「青年期中期Ⅰ（→Ⅱ）」で，状態は「能動的混乱」であろう。

2　高校3年時のA子

a　SCT 所見

2年時に比べて次の点で成長がみられた，

◎　家族への一方的批判から家族への思いやりが出てきた。「母について思うことは，父と結婚して苦労しただろうな。……大切にしなければ。今はわがままだけど」

◎　自己の過去を省ることができるようになった。（時間概念の変化）「子どもの頃，大家族で住んでいた。あの中でいろいろ身につけ，私は成長した。」

◎　将来に向っての社会的自己限定への関心が出てきた。「大人になったら，私はやりたい事，やらねばならない事をやって生きていくつもり……。」

b　自分の確立度面接

この一年間での大きな出来事は「好きな男性と別れたこと。それにより意外と自分が依存的であったことがわかった」である。全体として2年時にみられた傾向がはっきりと形をとってきたという感じである。父親に対する不満は，さらに強くなる一方で，母親は肯定し，自分が存在感があって豊かな女性になれるように心をくだいている。性役割形成が目下の大きな関心事である。自己イメージは「街路樹の中の一本の木」である。二年時の「成育中の木」に比べて形がしっかりし，社会性が出てきたと言える。

c　TAT 所見

2年時にみられたテーマが以下のように分化発展してきた。

◎　出立，困難，希望

イ）過去への郷愁と決別（Card 2，7 GF）

家，故郷を離れるのを前にして過去へ想いをはせる。

ロ）困難との取り組み（Card 1，11）

2年時は，出立したものの困難に直面し，立ち往生しているという状態であったが，今回の物語では，打開の方策がとられる。Card 1では，「くじけずに練習し」Card 11では，「正義の味方は救済される。」のである。

ハ）将来への希望（Card 8 GF，14）

苦しみから脱っした後の明日への希望が語られる。「束縛から自由になり自分のやりたいことをやる。」(8)「昨晩は失敗し，くやし涙で寝たが明日は頑張るぞ」(14)。

◎　異性愛―別れ，大人の愛へ（Card 6 GF，7 GF，10，15，20）

2年時は，空想的異性愛物語であったが，3年時は現実的な恋愛物語になっている。ほとんどの物語が男女の別れを含んでおり，しかも，夫婦や家族との関連で語られているために2年時に比べ，生活感を伴った物語となっている。少しずつ，大人の現実的な異性愛に移りつつある。「互いに愛し合っていたが家族のために別れる。」(10)

◎　家族に対する複雑な気持ち

家族の暖かさへの信頼（Card 19）家族からの別離（Card 2，6 GF）兄への複雑な思い（Card 13）母親との対立と思いやり（Card 5）父親的人物の無視（Card 6 GF）家族への回帰願望（Card 20）全体的に家族からの分離が進む中で，彼女の家族への複雑な思いがあらわれている。

＜まとめ＞

彼女自身の問題が明確になってきた。これは，彼女の意識において問題がナルシスティクな空想から少しずつ現実的な形をとるようになってきたことを示す。青年期中期の課題を消化しつつ，次第に後期に向う readiness が出てきたとも言える。

d　教師による評価

個性が強い子。理想を持っていて，自分をその理想の型にはめていこうとしている。もう少し現実を直視してほしい。

e　3年時の諸検査の総合所見

昨年に比べて問題がはっきりとした形をとるようにな分化してきた。空想的段階から現実的段階に向い始めた。性役割形成，家族からの分離，異性愛関係，将来への関心等において成長がみられ，自我の体制化が進みつつある。青年期中期のただ中にいた2年時に比べ，3年時は，やや後期に向かって前進した。発達段階は「青年期中期のⅡ」であり，状能は「能動的混乱」である。

3　進路決定について

以下に進路に関する調査の結果を示す。（　）内はA高校の平均点である。

進路知識尺度得点　19（16.5）

進路成熟尺度得点　41（42.1）

成熟尺度は，以下の3つの下位尺度より構成されている。自発性16（11.9），独立性15（17.3），計画性10（12.8）

進路決定地位は，E（Exploration）である。また，A子の進路決定に関して教師は次のように評価している。「成績は中の下。進路については変わったことを言っている。経済的なことや社会勉強を考えて最初から夜間大学を希望しているが，本人も迷っている。昼間は福祉関係で働き，同時に大学で資格をとりたいと言う。しかし，就職活動はしていない。親も困っているようだ。彼女自身いろいろ考えており，まだ最終的に決まっていない。」以上の結果から，A子の進路について，自発性はあるものの，独立性，計画性が弱いこと，3年の10月の時点でまだ進路がひとつに決まらずに模索（Explore）していることがわかる。A子との進路に関する面接から次のことがあきらかになった。進路決定の具体的問題は，大学を福祉関係にするか文学部にするかということ，及び彼女が主としてやりたい福祉は，親が絶対に反対していることの2点である。そんな中で，彼女は，自分のやりたいことをすべてやりたいと希望を持つ時ともうすべて投げ出してしまいたくなる時があると言う。ただし，ここで重要なのは，進路が既決か未決かということではなく，彼女が考えている選択肢は，彼女の自然な関心から生じているということである。自分を向上させるという目標のもとに，彼女は，自分の好きな明治時代の文学（文学部），あるいは，自分を生かす道（福祉）を高校2

年生ぐらいから模索，限定している。現在は，まだ，それが充分に統合されていないが，そこには彼女の強い主体性が感じられる。主体性があるからこそ親と対立すると言ってよい。一般的な話となるが，A子のように青年期の発達課題を達成しつつある青年にとっても（いや，むしろ，そのように成熟しつつある青年だからこそと言った方が正しいのかもしれないが）入試前に，模索→決定という Tiedeman (1961) の主張するような過程を経ての進路決定は困難である。つまり，高校時代に充分な模索を経験し，卒業時には，進路決定のための readiness が形成されているということは，現行の受験制度のもとでは，ほとんど不可能と言ってよいと思われる。

4　むすび

A子は，「現在の時点（3年時10月）で無理に進路を決めることはない。大学へ行ってからだっていろんなことができる。」と考えるようになっている。多くの同級生が模索なしに進路を決めたことにして安心している中で，彼女のように同級生よりも成熟している人は，主体性があるがゆえに問題をおこす。しかし，それは決して無駄ではないし，他者よりも早く大人への Initiation を経験していると言ってよいと思う。この点に注目しながら，彼女の今後のあり方を追跡していきたい。

なお，その後の情報から，彼女は，福祉と文学の大学を数校づつ受け，その中で合格した私立X大学の夜間部（文学）に通学しているとのことである。

B　事例　B男

2年時の SCT の結果から，混乱のない普通の生徒ということで，このB男を選んだ。家族構成は，父（50）母（43）妹（11）本人の4人家族である。身体は，やや小柄で，髪は長くぼさぼさで，本人の言うよういい印象にあまりおしゃれではない。人あたりが良く，親しみ易を持った。彼自身「自分は目立たない生徒」と言い，それで満足している。サッカー部に在籍していて，それを中心にした友人関係がある。高い理想は持たず，こつこつ現実的な面でマイペースでやっている彼は，高校2年時には，農芸化学をやりたいと進路を決めている。

青年期ということで，頭に浮かぶ混乱，危機あるいは，親との対立，異性関係などとは，ほとんど無縁であるB男の青年期のあり方をどのように考えたらよいのであろうか。少なくとも，日本の場合，A子のような青年期よりは，B男の青年期の方が多くみられると考えられる。B男のような青年期を着実な（安定した）青年期というべきか，それとも，不十分な（未熟な）青年期というべきか，その点について以下にみていきたい。

1　高校2年時のB男

a　SCT 所見

「心が広い」（父）「自分のことを思ってくれる」（母）と肯定し，家族との対立はみられない。学校でも友達を信頼し「仲間は，いい奴ばかり」と書いている。自己概念，情状性も肯定的で安定している。「人に比べて私は，すぐれている面があるかも」「自分の欲望や気持を，スポーツで解消する」という具合いに，のびのびしているというわけではないが，混乱はなく安定している。まわりの環境に適応し，対立することはないわかりに，彼なりの独自性がない。青年期特有とされる自己模索はあまり感じられない。しかし，彼なりに将来には目を向けている。「気になるのは，大学のこと，将来のこと」「大人になったら，家をかまえるぐらいの力はあるだろうか」

b　自分の確立度面接

サッカーをやっているのが唯一のとりえで，サッカーができるから，男に生まれて良かっと言う。信念のある男性になりたいと言い，父親は苦労人だから尊敬していると言う。親と対立してはいないが，甘えてもいない。それなりの距離は保っている。異性に対する期待はない。「学校では，まじめで消極的と思われている。自分は，それでいい。」と言い，自己顕示欲は感じられない。自己イメージが「陰にかくれてあまり目立たない木。でもきれいな花を咲かせることができる。」である。地味だが，それなりに自信を持っており，着実な彼の姿をあらわしている。

c　TAT 所見

堅実な彼の性格を反映して，派手な物語は少ない。彼の場合，大きな理想をかかげて試行錯誤をくり返すという物語は，ほとんどみられない。以下のテーマがみられる。

◎　始まり（Card 1，2）

新しい事態を前にして，慎重な彼は，どうしようか考える。しかし，ながめるだけでなかなか入っていけない。「バイオリンをながめ少しだけ弾く。」（1），「貧しい人の絵をみて日記に書く。」（2）

◎　家庭との密接な関係（Card 3，5，8 BM，10）

彼にとって家庭は常に安息の場所であり，彼の安定の土台となっている部分であろう。しかし，家からの分離は十分とは言えない。「外で悲しいことがあり，家で泣き，元気になる。」（3）「母親が呼びに来る」（5）「息子父の手術の成功を祈り，父は助かる。」（8）「母と息が子（娘）が再会し，幸せに暮らす。」（10）

◎　罪悪感　流浪―死（Card 15，19，20）

慎重で，家庭と密接な関係にある彼であるが，内的には，何らかの影の部分に気づきつつある。しかし，それは，あまりに結末があっけなく，死に結びついて終わりとなる。「死刑囚が霊魂に圧迫されてこれから死んでいく。」(15)「家か船が，造る時の犠牲者の魂でつぶされてしまう。」(19)「人里離れた所で死ぬ。」(20)

◎　彼の性格―堅実　慎重(Card 1，2，7 BM，11，13，14)

「ながめる」というのが彼の物や状況への接し方の基本のようだ。何かの事件が起きても，事態にまき込まれることなくあっさりと片がつく。彼の青年期があまり波風立たないものであるのは，このような彼の性格にも因るのだろう。「悪いことを相談し，警察の目を盗んで，活動する。」(7)「怪物に生けにえをさずけて村人は助かる。」(11)「女性殺しの犯人はつかまり事件は解決。」(13)「外の景色はいい眺めだと思っている。」(14)

<まとめ>

TATからみる限り，彼の混乱のない青年期について，次の2点が推測された。①彼の慎重で堅実な性格と家における安定とが相まって混乱はないが着実に青年期発達が進んでいる。②基本的には家からの分離が進んでおらず，彼の青年期はまだ充分に始まっていないのであり，発達段階は低い。この時点で①と②どちらが正しいとは言えない。ただ，たとえ①が正しいとするにしても，彼がすべての青年期発達課題をやり遂げていないことは確かである。

d　教師による評価

非常に地味な生徒。クラスの活動は消極的でおとなしい。サッカッは一生懸命やっている。

e　2年時の諸検査の総合所見

地味でおとなしい生徒であるが，それなりに自分に自信は持っている。家庭，学校でも人間関係が安定しており，混乱はない。慎重で，派手さはないが，少しずつ青年期が始まりつつある。試行錯誤というよりは堅実に進むタイプである。敢えて，前掲の発達段階と状態の表にあてはめてみるならば，「青年期前期」の「普通の順応」ということになるだろう。

2　高校3年時のB男

a　SCT所見

2年時と同様に家庭，友人関係は安定している。「母と一緒にいると　気が休まる。」「私の仲間は　みんなやさしい。」去年に比べ大学受験を強く意識するようになっている。「子どもの頃は，大学受験など考えないでよかった。」「不安なのは，大学受験のことだ。」それと同時に社会に出ることへの躊躇がみられる。「できることなら　A高校を卒業しないで仲間といたい」。「知りたいのは　将来のこと，でも知ってしまったらおもしろくない。」このような反応をみると，B男の場合，安定した青年期というよりは，未熟な青年期という印象を受ける。

b　自分の確立度面接

受験を強く意識するようになった以外は，ほぼ昨年と同じである。「女性のことなど受験で頭が一杯で考えられない。」「クラスの人は，僕のことを消極的で点取り虫と思っているかひしれないが，かまわない。」自己イメージは，「陰の木」から「伸び悩んでいる木」に変化している。受験が重くのしかかっているのだろう。しかし，「その木は，青い葉が一杯あり，これからグーンと伸びる」と将来については楽観的にみている。

c　TAT所見

2年時の物語を青年期の始まりとするならば，3年時の物語は青年期のただ中に進んでいくという感じである。しかし，それと同時に　早々と青年期（自己模索）が閉じてしまう傾向がみられる。ある意味で，非常に“あっさりした”青年期である，以下にテーマを示す。

◎　青年期の渦中へ―戦い，別れ(Card 6 BM，8 BM，11，14，20)

2年時は，混乱をそばでながめる傾向があったが，3年時ではその渦中に入り戦っている。「友をたち直らせるためになぐり合う」(6)「父親を撃ち殺す」(8)「一日が何年とも思えるほど苦しい日，明日もいろいろあるだろう。」(14)「怪物と戦い勝負はわからない」(11)「女性と別かれる」(20)

◎　青年期の早期完了（早産？）(Card 1，2，3 BM，5，10，13 MF，15，19)

模索，混乱，戦いが起こるが，あっさりと終止符がうたれて平和な世界が訪れる。これは自己模索が完了することなのか，それとも手がつけられただけで本質的には，始まらずじまいであったのか。「バイオリンを習うが練習がきついので親に言って止める」(1)「門限を破り親に怒られて泣くが，それをきっかけにして大人の心になる。」(3)「平凡な夫婦。」(13 MF)「ドラキュラが血を吸いに行こうとしているが，霊魂に退治される。」(15)「家族に愛があるので怪物は退治される。」(19)

<まとめ>

このようにあっさりしたTAT物語は，2年時のTAT所見でみたように彼の性格に由来するものであろうが，もう一方では，彼自身の青年期のあり方をよくあらわしている。B男は，表面的には混乱なく青年期をすごしている。ただし，深層レベルでは全く平穏というわけでは

なく，何らかの戦いをおこなっている。しかし，彼の慎重で堅実な意識がそれを表面に出さずに，あまりに簡単に片づけている。それで，表面的にはあっさりとした物語となっているのだが，これでは真の意味で青年課題を達成しているとは言えない。またCard 11の物語は，「通らねばならない関門である橋を急いで渡ろうと牛を押している。」というものであるが，これは，受験という関門を前に必死になって勉強をしている現在の彼の姿と重なるであろう。

d　教師による評価

目立たない生徒，クラブ関係の少数の気の合う仲間とつき合っている。成績は中の下で得意科目がない。生物をやりたいと言っているが数学ができない。しかし，希望は早くから決まっていて，こつこつと勉強しいる。

e　3年時の諸検査の総合所見

自他ともに認める地味でまじめな性格である。現在は大学入試をたいへん気にして勉強している。家庭―学校では潜乱なく適応しているが，深層レベルでは，青年期特有の「戦い，罪悪感，放浪」のテーマであらわれている。しかし，彼の慎重な意識が，それを表面に出さずに処理している。その点を考えると青年期課題を充分に解決しておらず，中途半端な青年期である。異性愛対象の発見や親からの分離というテーマは，ほとんど手がつけられておらず，自己限定（≒受験）のみが先行しているというアンバランスなものである。発達段階は，「青年期前期（又は中期Ⅰ）」状態は「普通の順応」であろう。

3　進路決定について

以下に進路に関する調査の結果を示す。（　）内はA高校の平均点である。

進路知識尺度得点　17（16.5）

進路成熟尺度得点　48（42.1）

成熟尺度得点の内訳は，自発性18（11.9），独立性16（17.3），計画性14（12.8）である。また，進路決定地位は，F（Fore-closure）である。以上の結果から，独立性はやや低いが，自発性が高く，進路成熟はかなり進んでおり，具体的に進路がひとつに決まっていることがわかる。進路決定に関する面接から，彼が農芸化学系への進学を決めていることがわかった。小さい頃より生物が好きであり，生物系の学問の中から消去法により選んでいったところ農芸化学という進路が残ったということである。かなり早い時期（2年の後半）に，あまり迷うことなくすんなり決まったようである。大きな夢や理想を掲げるわけでもなく，自分の好きな道を選んだ彼なりの堅実な選択と言えよう。ただし，彼の青年期のあり方は，そもそも模索とか試行錯誤とは縁遠いものであったことを考えるならば，B男の場合，真の意味で進路を選びとったとは言ない。むしろ，受験という外的課題に順応するために自己の道を限定していったと言った方が適当である。このような進路の決め方は，B男に限らず，大学受験を目ざす多くの高校生の一般的傾向と言える。B男の場合は模索はなかったが，自分の興味に合った進路を具体的に選んでいるだけましな方である。本研究での筆者の経験から考えてほとんどの生徒は，もっとぼんやりとした進路を決めてあるだけである。たとえば「どこの学部でもよいから入ることのできる大学へ行く。」「法学部ならどこでもいい。」という決め方である。ただし，受験に備えるためには，模索し，迷っているよりは，このよな未熟な決定でも決めてあった方が学校側からは歓迎される。本人達も，自分は進路を決めてある。」というだけで満足して安心している。現行の受験制度の中で求められているのは，模索よりはB男のような着実な適応であり，小じんまりとした統合である。

4　むすび

B男は，表面的には適応して着実に生きている。しかし，TAT でみられたように内的混乱は簡単に片づけられており，しかも，異性愛や親からの分離などの発達課題は，ほとんど手が着けられておらず，充分に青年期の課題を解決しているとは言えない。（日本の高校ではB男のようなあり方はかなり一般的であると思う。）B男は，はたしてこのまま早期完了的に成人になっていくのだろうか。あるいは，今後もう一度真の模索を始めるのか。彼のこれかたのあり方を追跡し，注目していきたい。

なお，その後の情報から1982年8月現在，第三志望であった私立Y大学の農学部に合格し，通学しているとのことである。

Ⅳ　要　　約

「進路決定」を青期の人格発達の中で，中期と後期の間に位置する発達課題と考え，発達の程度と進路決定のあり方の関連を考察した。その際，男（B男）女（A子）の2名についてのテストバッテリーを用いた縦断的事例研究という方法を用いた。その結果，発達段階の高いA子は，進路をひとつに決めずに主体的に模索しているのに対し，発達の未熟なB男は，早くから進路を限定して受験に取り組んでいる。以上の結果から，現行の受験制度のもとでは，進路決定が発達的意味をもたずに歪められた形でおこなわれている場合があることが確証された。

〔指導教官　佐治守夫教授〕

付　　記

事例研究と並行して，筆者（1982）は，SCT や CDT-3などの結果を統計的方法を用いて処理した研究をおこなっており，そこでも本論文と同様の結果を得ている。

文　　献

Blos, P. On 1962. Adolescence. New York Free Press. 『青年期の精神医学』野沢訳. 1971. 誠信書房

Erikson, E.H. 1968. Identity: Youth and Crisis. Norton

Erikson, E.H. 1980. Identity and the Life Cycle. (A REISSUE) Norton

Galinsky, M.D. and Fast, I. 1966. Vocational choice as a focus of the identity search. J of Counceling Psychology. 1. 89-92

Holland, J.K. and Holland, J.E. 1977. Vocational Indecision: More Evidence and Speculation. J of Counceling Psychology. 24. 404-414

Marcia, J.E. 1966. Development and Validation of Ego Identity Status. J of Personalty and Social Psychology..3. 551-558

Marcia, J.E. 1980. Identity in Adolescence. (ed.) Adelson, "Handbook of Adolescent Psychology." John Willy & Sons.

Munley, P.H. 1977. Erikson's Theory of Psychoscial Development and Career Development. J of Vocational Behavior. 10. 261-269

Munley, P.H. 1975. Erik Erikson's theory of Psychosocial development and vacational vehavior. J. of Counceling Psychology. 22. 314-319

村瀬孝雄，1972. 千葉県市川市の2つの公立中学校における縦断的健康調査から．精神医学14. 1127-1141.

村瀬孝雄，村瀬嘉代子，1974. 事例研究による平均的青年の人格発達過程．精神衛生研究22号　11-25

村瀬孝雄，1977. 三郎の青年期―成人式を迎えるまでの人格形成過程．精神衛生研究24号　109-133

Offer, D. and Offer, J.B. 1975. From teenage to young adulthood. Basic Books.

下山晴彦，1981. 青年期における自分の確立の研究．東京大学教育相談室紀要　第4集　109-119

下山晴彦，1982. 高校生の発達状況と進路決定。教育心理学会第24回発表論文集。in press

岨中達，1981. 受験体験と進路選択，留年．笠原編．キャンパスの症状群．弘文堂

Tiedeman, D.V. 1961. Decision and vocational development: A paradigm and its implications. Personnel and Guidance Journal. 40. 15-21

山本和郎，1966. TAT―かかわり分析法　井村他編．異常心理学講座第2巻．みすず書房

資料1　A子の CST, TAT 反応（一部）

項　　目	SCT 反　応（2年時）	SCT 反　応（3年時）
3　父について思うことは	尊敬はしていないが昔は好きだった。今は，嫌いな面ばかり見え，どうも顔を合わせたくない。	私は難しい時期。彼に反発，いやな面が目につく。本当は素直でいたいけど。
10　母について思うことは	日ましに幼くなっていくみたい。でもなかなかするどい。	優しい気持で人と接っしたい，彼女のように強くなりたい。
22　学校で私は	苦しみをじっとこらえ，楽しい顔をしている。人に自分の本心を見せるのは勇気がいる。	わりと良い子でいます。家ではわがままだけど。
2　子どもの頃	私は，子どもらしかった。無邪気でしたでもあまりかわいくなかったなあ　。	大家族で住んでいた。あの中でいろいろ身につき私は成長した。
7　人は私のことを	きっと理解しようとしてくれてるのだけれど，あまり干渉しないでほしい。	したいことをしてきたと言うでしょう。でも自由というのは難しくたいへんなのです。
17　私が知りたいのは	どうすれば速く走れるか，成績が上るか根性がでるか，もっとよい人間になれるか。	社会に出て，私が何をなすべきか，何をやりたいのか。
30　とても気にかかるのは	自分の将来です。	私は生きていく上でどんな苦しみを味わうのか。そして，どんな幸せを感じるのか。
24　おもしろくない気分の時	は，音楽をきくか歌をうたいます。	は，大好きな音楽を味わう。たちまち気分は直ってしまう。
18　大人は	わからない人ばかりいるけれど，いろんな話を聞いてみたいと思う大人も現われてきた。	本当の大人の人と子どもじみた大人に分けられる。後者から生まれた子どもが校内暴力などを出す。
9　大人になったら	自分をみがきつくしてすごくいい女になりたいと思っています。	私は，やりたい事，やらねばならない事をやって生きていくつもり。良い女性になりたい。

カード番号	TAT 反応要約（2年時）	TAT 反応要約（3年時）
No. 1	欲しかったバイオリンをやっと買ってもらった。でも，練習してもうまくいかないで悩んでいる。早く上達する手口はないかという感じ。	念願かなってバイオリンを手に入れて，やり始めたが，思っていた通りにいかない，簡単には上達しなかった。しかしこの少年はくじけずに練習する。
No. 2	この人は，農家の娘だが農業をつぐのがいやで町に勉強に出て行った。あることが起きて，村がなつかしくなって戻ってきたところ。でも，そのまま町に帰りそう。	この娘は，農村育ちで，農家の主婦として，この家で働かなければならなかったが，学問がしたくて都会に出ようとして旅立ちの前に今一度，自分の故郷をなめている。
No. 5	以前に恋人がいたがケンカ別れして，今は一人で住んでいる。ある日帰ったら恋人が戻っていた。でも，この女性は恋人に「帰ってちょだい」と言う。本当はいて欲しいんだけども。	この人は，娘と二人暮しの母親。母親の誕生日の前日に母娘がケンカをしてしまい娘は家を出た。翌朝，母親は，部屋の中に娘からのプレゼントの花びんと花があるのをみつける。
No. 10	やっと私の気持がわかって下さったんですね。今までは，本当は，好きだったけど，冷たくしてしまっていたが，ふとしたことでわかりあえた。	この二人は，愛し合っていたけど，わけがあって離れなくてはならない。今が，まさに別れる時，これから別れていく。別れる理由として，二人とも別に家族があるということ。
No. 11	原始林，山奥で宝がみつかった。金や黄金がみつかって万才する。でも，この後，分け前のことでケンカになりそう。なんか左上から人が降りてくる。	一人の正義の人を数人の悪者が左上から追いかけてくる。しかし，突然，道が切れて，神があらわれて，この人を助ける。悪人どもは退治され，この人は去っていく。
No. 13 MF	二人は夫婦で，男の人が帰ったら，女の人が死んでいた。で悲しんでいる。私達夫婦の幸せをねたんで，仲をひき裂こうとした殺人事件だった。	二人は兄妹。兄は妹の結婚に反対だった。兄が帰ってみると妹が自殺していた。兄は許してやればよかったと泣いている。この兄は一生，罪の意識にさいなまれて生きていく。
No. 20	野球チームの監督さんがチームが弱いのでどうすればいいのか悩んでいる。街に出て，ネオン街を考えながら歩いている。	昔，人を殺して，長い間，牢屋に入っていたんだけどもやっとシャバに出られた。明るい都会は楽しそうにしているが，この人は，奥さんの所に帰ろうかこのまま消え去ってしまおうか考えながら歩いている。

資料2　B男の SCT, TAT 反応（一部）

項　　目	SCT 反　応（2年時）	SCT 反　応（3年時）
3　父について思うことは	心が広く頭がいい。	戦時中よく働き，今もよく働くということだ。
10　母について思うことは	自分のことをよく思ってくれる。	やさしいということ。
22　学校で私は	友人と会っている。	サッカーしか運動をしない。
2　子どもの頃	おとなしかった。	大学受験を考えないで良かった。
7　人は私のことを	ひとがいいと言っていたことがある。今はあまり聞かない。	どう思っているのだろうか。
17　私が知りたいのは	未来のこと。	将来のこと，でも知ってしまったらおもしろくない。
30　とても気にかかるのは	大学のこと，将来のこと。	大学受験のこと。
24　おもしろくない気分の時	弱点をつかれた時。	は，寝る。
18　大人は	いろいろな性格のものがいる。	ネコみたいだ。ずるがしこく，しつこい。
9　大人になったら	家をかまえるぐらいの力があるだろうか。	何の職業につくかわからない。

カード番号	TAT 反応要約（2年時）	TAT 反応要約（3年時）
No. 1	バイオリンに興味をもち始めて，どういう風に持ち，弾くのか考えている。弾こうと思って持ち始めている。どうしようか考えている。少しぐらい弾くんじゃないかな。	バイオリンを買ってもらって先生に習っているんだけどもうまく弾けなくて悩んでいる。練習がきついのでやめようと思っている。これから親に言ってやめるんじゃないですか。
No. 2	イギリスの農村の情景の絵を少女(左)がみている。農夫たちは，たいへんなんだ。本にかいてある通りだと少女は考えている。家に帰って，日記にまとめ，自分の生活に役立てる。	ヨーロッパの風景。年貢が苦しい農家の夫婦と，それとは対称的な，よい身分の女性。よい身分の女性は，働いている人をみて自分は，何をしたらよいかを考えている。この後，この女性は，この人達のためにつくす。
No. 5	お母さんが呼びに来ている。「友達が来た」と言いに来た。ここは2階なので，子どもは，下に降りて行く。	この部屋は，門限を破って怒られた子どもの部屋。怒ったのは，お父さんでお母さんは，心配している。お母さんは，この子のために話しかけないでそのまま出ていく。
No. 10	お母さんと息子か娘。今まで離れていてやっと会えた。これから幸せになっていく。	お母さんと娘がやっとめぐり会った。娘さんは，養子に出されていて，本当のお母さんのことを知って会えた。これからは，幸せに暮らす。
No. 11	剣しい谷。牛のようないけにえを連れてきて怪物にさずけている。村人は，自分達に被害が及ばなくて良かったと思っている。中世の騎士がやってきてこの怪物をやっつけちゃう。	竜が牛を食べようとしているので，急いで橋を渡らせようと牛を押している。ここは，どうしても通らなければならない関門。助かるかどうかは，わからない。
No. 13 MF	女性は，死んでいる。警察が，スポットを当てている。犯人は，まぶしくて，もうつかまったと思っている。それで事件は解決。二人は，元夫婦だったがいざこざがあった。	男性は，眠たいが，会社に行かなければならないから机の上の本を持って出かけていく。女性は奥さんでまだ，気楽に寝ている。平凡な夫婦。
No. 20	港の霧の中で，ガス燈。やめさせられた船員が行くところもなく立っている。どこかに去っていく。人里離れた所で誰にも会わず暮らし，死んでしまうとか，消息不明とかになる。	港街，電燈の下で男の人が何か思っている。女の人が来るが，この男の方から別れ話をもち出して去っている。女の人は別れたくない。この男の人は，転々と渡り歩いて女性と知り合い，別れていく。